

北の譜

聞き手 奥津義広記者(北海道新聞社)

⑥<土俗的三連画>

チェレプニンに師事

チェレプニン賞を受けた翌昭和十一年八月ごろ、チェレプニンが日本に来ました。厚岸にいる僕に「会って話がしたい」と連絡があった。こっちも「待ってました」と喜んだんですが、何分旅費が乏しい。ところが「そんなの気にするな。宿賃は出す」というんですね。じゃありがたく、とチェレプニンのいる横浜に行ったわけです。

会ってみると、チェレプニンは大柄で立派な人でした。教授料もとらずに、作曲法や管弦楽法を教えてくださいました。ひと月ぐらい居たんじゃないでしょうか。疲れるとソーダ水を飲んだり、ロシアの話など雑談して、また「それ弾け」というわけです。

人に師事して音楽の直接指導を受けたのは、後にも先にもこの時だけです。「何の恩返しも出来ないので作品を献上する」といったら「それが一番いい」といってくれました。ヨットも知らないような恥を、音楽の世界でかいては困るから、もっと勉強しようと本を買い込み、山へ戻りました。

冬のヒュッテで作曲

林務官というのは、冬になると、ヒュッテにひとりでこもっているから、身を入れて勉強出来るんですね。吹雪の時なんか山を見回らなくてもいいので、完全に一日休めるわけです。

ヒュッテにはギターとバイオリンも持っていきまして、ランプの光の中で「土俗的三連画」という曲を書きました。昭和十二年ですか。小さなオーケストラでしたが、この曲をチェレプニンに献上しました。曲のテーマに厚岸半島のチンベという地名が出てきますが、ここは昔、アイヌが和人に追われてがけから落ち、死んだという伝説が残っているところです。

今年の五月二十三日にニューヨークのカーネギーホールで、この「土俗的三連画」と「アイヌ叙事詩に依る対話体牧歌」が演奏されることになっています。日本から十四人編成の室内オーケストラで向こうに行くようです。

林務官をやめ札幌へ

ところで、チェレプニンは来日した折、札幌の両親のところまで来て、「音楽家にならないか」と勧めてくれたのですが、私は「その力がない」と踏み切れなかったんですね。これがチャンスと、この時、音楽の世界に飛び込んでいけば、もう少し違った生き方になったかもしれません。この後もしばらく音楽とは直接関係ない仕事を続けてましたから、だいぶそこで手間取りましたね。

厚岸では「アッケシザクラ」という新種のサクラを発見したことも忘れられない思い出です。

場所は国泰寺の付近で、北大の舘脇操さんが新種と認めて、二人の名が付いています。

結局、厚岸には五年ほどいて、太平洋戦争の始まる前の年の昭和十五年三月に、林務官をやめて札幌に戻ってきました。これは、兄貴の結婚式で札幌に出てきた時、富貴堂で、フランスのジャン・フランセの「ピアノ・コンチェルティーノ」というレコードを聴き、「世の中はこんなに進歩しているのか。へそを曲げて山の中にこもってはいはだめだ」と考え、思い切ったわけです。



▲厚岸、チンベの岬

札幌では北大の演習林事務所嘱託として、図書管理などをしていましたが、昭和十五年はちょうど皇紀二千六百年、札幌でも八月に記念聖火祭を開くことになり、オーケストラの指揮を頼まれました。

新聞などを通じてオーケストラやコーラスの参加者を募集したんですが、札幌だけでは足りず小樽からも来てもらいましてね。練習は時計台の二階でやったんです。

聖火祭の会場は円山公園の裏のあたりで、かがり火をたいて。とにかくお祭だからと、オーケストラが四、五十人、コーラスが百人以上いたんじゃないでしょうか。曲目は雅楽の「越天楽」です。それを Rond 形式にして、群舞も一緒にやりました。

昭和 60 年 4 月 3 日(水)夕刊

水曜ぷらざ